

知床半島におけるヒグマ対策に係る 「将来シナリオ」について

今回の「知床半島ヒグマ保護管理方針」は、現在実施しているヒグマ対策を整理したという側面が強く、たくさんの「今後の課題」があります。（例えば、知床では人とヒグマの近距離での接触が日常的に発生していますが、追い払い等の実施のみでは人慣れヒグマを減少させることは困難と考えられ、人とヒグマの接触を減少させる措置、あるいは接触を管理する方策が必要であります。現在の管理方針ではまだ積み残している、といったことです。）したがって、5年後に見直して再作成される「第2期知床半島ヒグマ保護管理方針（仮称）」は、これらの課題について対応したものでなければなりません。

「第2期方針」について、どのような条件、課題、とるべき方策、予想される結果等（これらを組み合わせたものをここでは「将来シナリオ」と呼びます。）を前提として作成するかは今後の検討次第ですが、今回、「知床半島ヒグマ保護管理方針」の検討を行う中であわせて検討された「第2期」に盛り込むべき将来シナリオの複数案（どれにするなどの議論はしていません。）の概略を参考までにご説明します。

第2期方針の検討に当たっては、このような将来シナリオをブラッシュアップし、どのシナリオをとるべきか、住民の皆さんのご意見を聞かなければいけないと考えています。

知床半島のヒグマ対策 将来シナリオについて

シナリオ	目標	概要	ヒグマとの軋轢対策			コスト	ヒグマの個体数	人間への影響		予想される課題
			駆除	防御	普及啓発			ヒグマとの軋轢	知床の魅力	
今回の方針による「現状のシナリオ」 (現状の管理を継続)	利用者の安全と良質な自然体験の場を確保しながら、ヒグマの生活様式と個体群を現行水準で維持する。	現状の管理を継続 (追い払い、問題グマ等の駆除、電気柵など)	↑ 出没増加とともに増加	➡ 順次、電気柵等の整備を進めるが、整備されない部分もある。	➡ 今までの取組を継続(限定的で、あまり進まない)	➡ 出没増加とともに増加	➡ ヒグマ個体数は現行水準から大きく変化しない	↑ 出没増加とともに増加	？ 遭遇機会増加(魅力と危険)	○ヒグマの人慣れ個体が増える恐れ ○ヒグマ観察と管理活動との対立

5年後

<第2期方針で想定される3つのシナリオ>

シナリオ	目標	概要	ヒグマとの軋轢対策			コスト	ヒグマの個体数	人間への影響		予想される課題
			捕獲	防御	普及啓発			ヒグマとの軋轢	知床の魅力	
シナリオ1: 現状の管理を継続しつつ、防御対策を若干強化	利用者の安全と良質な自然体験の場を確保しながら、ヒグマの生活様式と個体群を現行水準で維持する。	今までの取組を継続 + 大幅に管理コストを増加させない範囲で防除対策(電気柵、忌避学習など)を強化	➡ 防除対策強化のため増加緩和か横ばい	➡ 管理コストを大幅に増加させない範囲で電気柵、ワナ捕獲、忌避学習などを強化	➡ 今までの取組を継続	➡ 防除対策の分だけ増加	➡ 現状のシナリオと同様の水準	➡ 防除対策強化のため増加緩和か横ばい	➡ 変わらず	○ヒグマとの軋轢が継続的に発生 ○ヒグマの人慣れ個体が減らない
シナリオ2: 問題グマの捕獲強化	地域住民の生活や産業を守り、利用者の安全を確保する。	遺産地域内外を問わず、問題個体や人に慣れつつあるヒグマを積極的に捕獲 + 今までの防御的取組を継続(もしくは抑制)	↑↑ 出没増加以上に増やす	➡ 今までの取組を継続	➡ 今までの取組を継続	➡ 追い払いの代わりに捕獲防除対策強化のため増加緩和か横ばい	↓ 被害減少以上に個体数減少の恐れ	➡ 捕獲数増加の分が減少	➡ 利用者がヒグマを観察する機会が減少	○ヒグマ個体数が減少し、将来的に知床半島の個体群が絶滅するおそれがある ○積極的なヒグマ捕獲について、保護団体から反発がおこる ○世界自然遺産地域の管理として、国際的な理解を得られない ○長期的に捕獲を実施するためのハンターの確保が困難 ○利用者がヒグマを観察する機会が減少する
シナリオ3: 公園利用のコントロールと防御対策の強化	地域住民の生活や産業を守り、利用者の安全と良質な自然体験の場を確保しながら、ヒグマ個体群を保全する。	公園利用のシステムを変更し、利用者の安全を確保する策を講じる。(普及啓発、講習会の開催、ガイド付き利用の推進、広域的なシャトルバスの導入など) 電気柵などを広範囲に設置し、積極的に防御対策を行うことで、新たな問題個体の出現を予防	➡ 捕獲数は抑制	➡ 電気柵などを広範囲に設置し、積極的に防御	➡ 利用者の安全を確保するため、積極的な普及啓発	↑↑ 施設の整備などに、予算の大幅な増額が必要	➡ ヒグマの個体数が増加(遺産地域外にも分散)	➡ 利用コントロールと防御対策の強化の分が減少	➡ 利用者がヒグマを観察する機会が増加	○利用者コントロールシステムやシャトルバスシステムの導入により、利用者が減少するおそれ ○ヒグマの個体数が増加し、遺産地域隣接域にもヒグマの影響が懸念される ○電気柵が設置されない一部の地域でヒグマによる被害が増加する ○大幅な管理コストの増加により、行政のコストが過大になる